

黙示録の記録

第15章

宣告の日の幕開け・
運命の決まる日の序曲

著／ヘンリー・モリス

訳／宇佐神正海

第15章

宣告の日の幕開け・運命の決まる日の序曲

黙示録15章は、黙示録の中で最も短い章です。元来16章のプロローグで、地上に来る第七の大きいなる怒りの鉢と第七の最後の災害の憂鬱な物語の前口上としての役目を果たしています。15章は事実上明らかに大切であるにもかかわらず天の御座での喜びと栄光の美しいかすかなきらめきをも前もって与えているのです。

黙示録

黙示録に記された七年間の年代的枠組みは、特に6章「封印の裁き」、8章、9章「ラツパの裁き」、と16章「鉢

の裁き」から成っています。封印とラッパの裁きは、主として最初の3年半で、鉢の裁きは終わりの三年半に当たります。とは言っても、第七の封印は第七のラッパを解き放ち(黙示録8:1, 2)、第七のラッパは、七つの鉢を呼び出します(黙示録11:15; 15:1, 2)。そして、鉢が地にぶちまけられる第七のラッパの音は、空中で反響し続けます。第七のラッパは、また第三のわざわいと同じです(黙示録11:14; 12:12)。七章は挿入された啓示で、年代的には封印とラッパの裁きの間に挿入されているが、同時に患難期の終りのラッパの裁きを望み見えています。10章は、同じようにラッパの裁きの終りに現れ、また、患難の残りの年月を前もって見せています。11, 12, 13, 14章は長年のテーマを明瞭に詳しく説明するために挿入された章です。それらの章は、患難期の中間点を眺望しているが、これらの章は創造主とサタンの闘争のまさにその初めをも振り返って見て、その終わりを前もって展望しています。特に、それらはかぎになる出来事と人物を患難期の初めからその頂点である終わりに至る出来事まで大まかに述べた上でやがて来る永遠の時代を望み見えています。

同様に、15章は部分的挿入ですが、それでも15章は16章の年代順の災害の再開の前置きです。15章は、創造主の以前の裁きを振り返って見た上で、またも、やがて来る栄光を望み見えています。そして、創造主の怒りの鉢である最後の第七の裁きを紹介しているのです。

ガラスの海での歌

この章はその後に来る驚くべき幻で幕が開きます。前例のない14章の最後の節にある大量殺人と裁きの幻とは完全な対比をしており、なおさら美しく栄光に満ちた光景です。これらの両者は、驚きの目をもって見つめているヨハネの眼前に創造主がもたらした光景です。「わたしは見た。見よ…」(黙示録14:14)。「また、私は・・巨大な驚くべき・・見た。」(黙示録15:1)。使徒ヨハネは、これらの幻をでっち上げたのではなく、実際に「わたしは見た」と私たちに保証し強く主張しているのです。

黙示録15章1節 また私は、天にもう一つの巨大な驚くべきしるしを見た。七人の御使いが、最後の七つの災害を携えていた。創造主・神の激しい怒りはここに窮まるのである。

これは、ヨハネがこのようなしるし(ギリシャ語で semeion)と黙示録で認めた第三の記事です。その二つの箇所一では「wonder:不思議」と訳されていて、しばしば他の所では「miracle:奇跡」と訳されています。けれど、後で用いているところでも、その最初の用い方はしるしに関する用い方です。確かな奇跡というものは創造主のまたとない力の現われであり、それらの目的は、その力を立証することとそのしるしが示唆している霊的学習を教える事です。偽りの預言者が行なった奇跡でさえ(黙示録13:13, 14)、偽りの預言者は自分自身が持つ並外れた力のしるしとして用いようと意図しているのです。

黙示録で創造主によって与えられた最初の印は、巨大な女のしるしであり、第二は大きな竜のしるしであった(黙示録12:1, 3)。これらは両方とも、またも「奇跡」か「不思議」であり、彼らは天に特別に創り出され

た生き生きとした描写であり、女の末と年経た蛇・サタンとの間に横たわる長年の闘争に横たわる主要な特徴を生き生きと描いています。

同じようにして、この第三のしるしは、空にある驚くべき光景で、地上で演じられようとしている大いなるドラマと壮大な聖歌隊の前もつての試写であり、彼らは最終的勝利の場で進んで合唱します。勝利のうえにさらに勝利を得ている女の末は、遂に大きな穴にその年を経た蛇を閉じ込め（黙示録20:2, 3）、代わりに、獣が滅ぼそうとしていた総ての人々は、キリストと共に治めます（黙示録20:4）。

創造主がこのような三重のしるしを以ってしばしば預言者や聖職者に創造主の啓示を聖書で確認しているのは、実に大切です。このようなことは、ヨセフのために（創世記37:5, 11; 40:8, 22; 41:15, 40）、モーセのために（出エジプト3:2; 4:2, 5; 4:6, 7）、ヨシュアのために（ヨシュア4:2, 2, 24; 6:20; 10:10, 14）ギデオンのために（士師記6:3, 6, 40; 7:1, 3, 15）サウロのために（サムエル10:1, 7）エリヤのために（一列王記19:9, 13）、エリシャのために（一列王記2:14, 22, 24）へゼキヤのために（一列王記19:20, 29; 35:3, 6; 8:11）、エゼキエルのために（エゼキエル1:1; 3:2, 2, 2, 2, 3; 8:4）その他の人々のためになされていた。ヨハネはまたこのようにこの特殊な三重のしるしを受け取っており（ヨハネが見たその他のすべてのしるしの真ん中で: ヨハネ20:30, 31）、それをヨハネが私たちに証言しているのです。

この第三のしるしは、聖書の他のどこかでかつてただ一度用いられた「偉大で驚くべきしるし」という句で、それに次いで二つの節が出て来ます。そのしるしは偉大で驚くべきものであった。なぜならそれを描かれた創造主の行為は、偉大で驚くべきものだからです（黙示録15:3）。これら七つの最後の災害は、最もひどい災害です。その封印は地上にひどい災害を（黙示録9:20）もたらしたが、ラッパは、なおもひどい災害（黙示録9:

20）をもたらし、しかもこれらはすべての災害の中で最もひどく最も恐るべきものです。

創造主は憤って人に語っておられましたが、人々は気にも留めませんでした。今や、創造主は燃える怒りで彼らを恐れおののかせます（詩篇2:5）。これらが最後の災害である事は、それらの災害は以前の災害の単なる繰り返しでない事をここでもう一度証明しています。封印とラッパと鉢のさばきは次々と起こるので決して並行して起こるものではありません。これらの災いで創造主の怒りは遂に完了します（満たされます）（ギリシャ語テレオは8節では満たされと訳され、黙示録10章7節では、成就すると訳されています）。

「災い」と言う言葉は、病氣と言うよりむしろ法的に課された苦しみと言う考えを伝えています。それはしばしばルカ12章47節のように「むち打たれる」と訳されています。黙示録13章3, 12, 14節では「傷」と訳されています。天に画がかれた大いなるしるしは、遂にかつとなって長く耐え忍んで来た裁きに対するあふれ出る怒りを描写しています。そして、最も厳しい刑罰と創造主が執行できる最も致命的な打撃を与えます。

創造主の裁きを管理する七人の天使は、彼ら自身も象徴的で、しるしの一部です。彼らは恐らく、創造主につくすすべての聖なる天使たちの代表です。なぜなら、すべての天使は、創造主の偉大な目的を最終的に成就する点で重大な関わりがあるからです（ペテロ1:12）。創造主の御前に立つ特別な七人の天使達は（黙示録8:2）、七つの裁きのラッパを与えられていましたが、最後の災害をもたらすこれらの天使達は明らかにすべての天使を意味しているのです。

しかも、これらは七人の特別な天使であるかも知れないし、同時にすべての天使を現わし得るのです。このことは特に興味深い。アジアにある七つの特定の教会を守る仕事を割り当てられた七人の特別な天使がお

り、ヨハネは、その各々の教会に宛てて手紙を出しています（黙示録1:11）。これらの天使たちは、御子の右手にある「七つの星」であり（黙示録1:13, 16, 20）、独特の意味と重要性を持っていた。しかもなお、これらの七つの教会がすべての教会を表し、こうして、七人の天使はすべての天使を表す（エペソ3:9, 11）と取つて問題はありません。これらの七人の天使達は、地上にいる創造主により頼んでいてる人々を注意して見守り続けており、この働きをする全ての天使を現わしているはずで、このようにして最後の七つの裁きの管理を続けています。この最後の裁きが、善良かつ忠実な執事としての働きを全うする事によって、最終的にあるべき目的に相応しく地球を回復します。このことが可能であることはさらに次の事実によって示唆されています。天使の1人はヨハネに偽りの花嫁、大淫婦の教会の裁きを見せ、他の天使は、ヨハネに小羊の花嫁・真の教会の永遠の住まいを見せています（黙示録2:1-9）。

これら七つの教会の御使いが、最後の七つの災害を齎す天使かどうかは、もちろん、空にあるこの第三の大いなるしるしの重要性に影響を及ぼすことはありません。さらに、これはしるしの単なる一部に過ぎません。創造主により頼む人々に関する実に特別な要素もここに描かれているのです。

黙示録15章2節 私は、火の混じった、ガラスの海のようなものを見た。獣と、その像と、その名を示す数字とに打ち勝った人々が、神（創造主）の立琴を手にして、このガラスの海のほとりに立っていた。

ヨハネが巨大な驚くべき天にあるしるしを見続けていると同時に、ヨハネは、また贖われた男女からなる驚くほどの群衆を見えています。既に述べたように、七人の天使たちは、救いを受け継ぐ人々に奉仕する聖な

る天使すべてを象徴しており（ヘブル1:14）、患難期の後半から出て来た特別なこれら群衆は、いわば、天に移されるはずの聖徒たちの最後の一団です。彼らの肉体は、地上を襲った第七の災害の時に殉教の死を遂げていました。すべての人は獣の刻印を受け獣の像を拝まなくてはならない、それに違反すれば死刑に処すると法律で定められていたのです（黙示録13:15, 17）。一方、創造主は、獣を拝み獣の刻印を受ける者は誰でも永遠の苦しみに投げ込まれると宣告していた（黙示録14:9, 11）。永遠の救いにあずかる肉体の死か永遠の呪いに至る肉体のいのちか―それらは彼らにとって厳しい選択であるに違いない。そして、大衆は、地上での短い期間の悲惨な生活が続ける方を選びます。そして、獣により指示された死刑執行人たちよりもむしろ創造主から来るすべての裁きを耐え忍ぶのです。

しかし、これらの人々は獣に打ち勝っていたのです。彼らは、「死に至るまで命を惜しまなかった」（黙示録12:11）ので、獣に打ち勝ったのです。実際に彼らが集合するには、患難期の終りに起こる彼らの復活を待たなくてはなりません（黙示録20章4, 6）。しかし、ヨハネは、いわば象徴的天使達と共に天に繰り広げられたしるしで、彼らを既に見ることが出来たのです。

そのしるしには、いわば、火の混じった驚くべきガラスの海があり、そこには（ギリシャ語の *πῆμα* は傍らとも訳すことが出来る）殉教した聖徒たちが立っていた。キリストが空中に帰って来られる時、天にある神殿に置かれた御座の前に、水晶に似た硝子の海（黙示録4:6）があつたけれども、しるしにあつた特殊な海は真の海を象徴しているに過ぎない事を思い出す必要があります。そこで聖徒たちは患難期の終りに一緒に歌っているのです。

ソロモンの神殿（一列王記7:23）にも海があり、その神殿には、10個の洗盤があつたか、海と洗盤とは犠牲のささげ物との関係で身を清めるために用いられた。天の神殿にある海は明らかにそれ以上に大切なこと

を描写しているはずで、何故なら天にいる祭司たちはこれ以上身を清める必要はないからです。キリストが空中に帰って来られた時、天の神殿におかれた御座の周りに実際に水晶の海(黙示録4:6)があつたけれども、しるしにある特殊な海は真の海を象徴しているに過ぎず、そこは聖徒たちが患難期の終りに一緒に歌を歌う所であることを記憶に留めなくてはならない。

ソロモンの神殿にも海があり(1列王7:23)、神殿には10の洗盤が備えられ(1歴代誌4:6)ていたが、海も洗盤も犠牲の捧げものとの関係で清めに用いられていた。天の神殿にある海は明らかにそれ以上重要な何ものかを描写しています。なぜなら、天にいる祭司たちをこれ以上清める必要はないのですから。黙示録4章6節に書かれている美しい「水晶に似たガラスの海」ということばは、実際の説明ではなく、その目的は、少なくとも、ここにある象徴的表現で明らかにしているのです。次の節で判るように、創造主を信じたすべての民にとって歴史上極めて重要な記念の意味を持ち、混じった火によって、来るべき裁きを物語っているのです。

この特別な群衆は、また豎琴と7弦の弦をも持っています。天使達のラツパと聖徒たちの豎琴は、少なくとも黙示録に記されているように、天にある唯一の楽器(黙示録5:8; 14:2)です。「(楽師と笛吹き)と共に)」たて琴をひく者、笛を吹く者)は、黙示録18章22節に記されているように、邪悪なバビロンでありふれたものとなります。とにかく、聖なる都と新しい地には音楽と歌声が確かに豊かにあるのです。

黙示録15章3節 彼らは、神・創造主のしもべモーセの歌と小羊の歌とを歌って言った。「あなたのみわざは偉大であり、驚くべきものです。主よ。万物の支配者である神よ。あなたの道は正しく、真実です。も

ろもろの民の王よ。彼らは、神・創造主の僕モーセの歌と小羊の歌とをうたった。「全能者である神・創造主、主よ、／あなたの業は偉大で、／驚くべきもの。諸国の民の王よ、／あなたの道は正しく、また、真実なもの。

ヨハネは、創造主のしるしに見られるガラスの海の傍らに集まっている贖われた聖徒たちが、二つの勝利と賛美の大合唱・モーセの歌と小羊の歌を歌っているのを見、聞かされています。海そのものが表す象徴的意味を紐解く重要な手掛かりは、モーセの歌であり、それが最初に歌われたのは遙か昔イスラエルが奴隷状態から救出され、エジプトの軍隊が裁かれた海の岸辺であつたからです。

新しい地には「もはや海はない」(黙示録21:1)けれども、創造主の御座の周りにある水晶のように美しい海は、最初の地球で創造主の目的と創造主につく人々のためにかつて成し遂げた偉大な海の記念としてふさわしいのです。たとえば、水は、清めるために・・・幕屋の洗盤と神殿の海が用いられました。しかし、新しい地では清めはもはや必要としないのです。

この場合一層重要な事は、海は創造主によつて創造主につく民の救出と彼らの敵に対する裁きのための手段として用いられてきた事実にあるのです。これはもともと「モーセの歌」のテーマでした(出エジプト15:1-2)。「主に向かつて私は歌おう。主は輝かしくも勝利を収められ、馬と乗り手とを海の中に投げ込まれたゆえに(1)・・・あなたが贖われたこの民を、あなたは恵みをもって導き、御力をもって、聖なる御住まいに伴われた(13)・・・主はどこしえまでも統べ治められる(18)。

最初3500年以上前に作曲されたこの歌の幾つかの部分は、これら患難期にある聖徒たちに特にふさわしく、彼らを救った同じ紅海が強大なパロの軍勢を滅ぼした時、古代のモーセの歌とこれら最初のイスラエ

ル人たちの素晴らしい救出を、彼らは思い起こしたと言ってもよいのかもしれませんが。海の水に押し寄せられて水浸しになった馬と騎手は、彼らが見た馬の轡(くつわ)に達するまでの血の海にも匹敵するとさえ思われることでしょう。

又、モーセの他の歌もあり(申命記3:1-30)、それらは申命記32章1-43節に記されていて、それらもまた患難期にある殉教者たちが歌うのに適切なものかもしれません。他に可能性のあるのは、「創造主を敬う人・モーセ」の作とされている詩篇、90篇です。しかしながら、最もふさわしいのは、創造主の大いなる救出を讃えた紅海の岸辺での歌と思われまます。

大昔のあの救出でさえ、海の水による大いなる裁きと救出があつたのです。「昔、ノアの時代に、箱舟が造られていた間、創造主(神)が忍耐して待つておられたときに、・・・わずか八人の人々が、・・・水を通つて救われたのです。」(1ペテロ3:20)。創造主を敬わない世界を滅ぼした同じ水が、あの時代の滅びから信じて箱船に入った残りの民を救われたのです。罪に対し死に聖なる歩に甦つたことを象徴しているバプテスマの水は、紅海の水と大洪水の水の両方になぞらえられています(1ペテロ3:20, 21)。

こうして、天の御座にある海は、洪水の水、紅海の水とバプテスマの水を永遠に思い出させます。すべては、反抗的な人々の邪悪さに対する創造主の裁きと創造主を信じそのみことばを守る人々に対する創造主の大いなる救いの両方を物語っています。この迫害を受けていた最後の信者たちの一団もまたこれらを大いに経験しており、それ故、皆古代のモーセの歌を一斉に心から歌っていたのです。

しかし、また彼らは喜んでほかの贖われた大勢の人々の歌う小羊の大合唱にみなで加わります(黙示録5:8-14)。創造主が彼らを救う事が出来たのは、ただ創造主の恵み深い働きによるだけでした。彼らは獣と竜に

打ち勝つ事が出来た。そして、彼らが喜んで証して彼らの信仰に殉じただけでなく、何よりもまず「小羊の血によつて」の勝利でした(黙示録12:11)。

確かにある人が教えているように、モーセの律法と小羊の間に矛盾はありません。書かれた律法はモーセによつて与えられ、恵みと真はイエス・キリストを通して実現した(ヨハネ1:17)。すなわち、両方とも人に対する創造主のみこころ全体を構成する要素です。(ヨハネ1章17節の対比は原著にはありません。)贖われた聖徒たちは、同じ信仰と情熱をもつてモーセの歌と小羊の歌とを歌う事が出来るのです。

たとえ出エジプト記15章と黙示録5章に記録されているようなこれらの歌のどれも、この節に引用された明確な出典とはなり得ないとしても、高く挙げられたことばは、完全に両者と調和します。創造主の御業(黄海での力ある奇跡も、更に偉大なるカルバリからの墓での奇跡でも)は、実際に「偉大で驚嘆すべき」です。創造主の方法(反逆するバロの破滅も、身代わり十字架での罪のない御子の身代わりの犠牲)は確かに正しく真実です。創造主の為されることは何でも正しく、創造主の語られることは何でも真実です。

彼は、「全能者である創造主、主」(この言葉は黙示録で5回用いられ、他にはどこにも用いられません。)であり、「全能者」(ギリシヤ語παντοκράτορ)は、「無限の力を有するもの」と同義語です。創造主は、また辛抱強い。そして人が悔い改めに至ることを望んでいます。問もないある日、創造主は御自身の偉大な力と支配を自分の権限のうちに取り戻します(黙示録1:1-7)。創造主はすべての創造者です。それゆえ、すべての主権者(統治者)なのです。

しかし、また創造主は「聖徒たちの王」です。この肩書が用いられている聖書の節はどこにもなく、幾つかの写本で、それを「諸国の王」とか「世紀の王」と示しています。しかしながら、これら二つの肩書は聖書のどこにも見られません。そして、一般に受け入れられているテキスト欽定訳に基づいて検討する時、本

文に最もよく合います。

聖徒たちすべての王として（聖徒たちと言っ用語は、イエス・キリストを救い主として心から信じている眞の信者にあてがわれた唯一の用語）、主イエスは間もなく彼らを戦争へと導きます（黙示録19:7-16）。この重大な局面において、キリストはまだすべての国々の王とはなっていません（次の節を注意せよ）が、聖徒たちはすべて喜んでキリストの統治を認めます。そして、キリストは正義であり眞実であることを豊富な経験から知っています。

過去の水による裁きと救出を物語る水晶の海には火が混じっていて、また燃えるような裁きが差し迫っていることとそこからの救出を物語っています。同様に、使徒ペテロは、まず第一に、人々に以前起こった水による大洪水を思い出させた。その洪水は当時の天と地とを清め、次いで「現在の天と地」は「火で焼かれる時までそのまま保たれている」と人々に警告しています（1ペテロ3:5-7）。水と火は地上では混じり合わないが、天にある大いなるしは、天に於いては彼らが混じり合う事を示し、両者は創造主の恵みと眞実さと同様に創造主の権力と正義を証しているのです。

黙示録15章4節 主よ。だれかあなたを恐れず、御名をほめたたえない者があるでしょうか。ただあなただけが、聖なる方です。すべての国々の民は来て、あなたの御前にひれ伏します。あなたの正しいさばきが、明らかにされたからです。」主よ、だれかあなたの名を畏れず、／たたえずにおられましょうか。聖なる方は、あなただけ。すべての国民が、来て、／あなたの前にひれ伏すでしょう。あなたの正しい裁きが、／明らかにされたからです。」

この節は殉教した聖徒の歌へと続き、モーセの歌と小羊の歌の両方の主旋律を繰り返しています。「主よ。神々のうち、だれかあなたのような方があるでしょうか。だれかあなたのように、聖であつて力強く、たえられつつ恐れられ、奇しいわざを行なうことができましょうか（出エジプト15:11）。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」（黙示録5:12）。

地に住む人々は「だれがこの獣に比べられよう。だれがこれと戦うことができよう。」（黙示録13:4）と公言していた。地に住む人々は獣と戦いを交えました。そして、今や「主よ、誰が主を恐れないでいられようか」と答えることが出来た。諸国の民の上に立つ権威が獣に与えられたが（黙示録13:7）、間もなく諸国の民すべてが、主に腰をかかめなくてはなりません。創造主・主はただ一人聖なる方です（ギリシヤ語ホシアス：聖に対する通常のことばではなく、絶対的の正しさを強調しているのです）。定義そのもので創造主だけが完全に正しく、それ故、遅かれ早かれ、すべての人はやがて創造主を恐れ、栄光を誉め讃え、礼拝しなければなりません。

創造主の裁き（即ち、「善の行為と義のことば」）は、間もなく歓呼の声で完全に正しい方として迎えられます。その時、すべての人は、創造主の刑罰でさえ最も完全でそのまま受けるに足るもので、合法的にただしと理解し認めます。地上にまさに炸裂しようとしている恐ろしい災害は、数えきれない破壊をもたらしますが、創造主の義なる目的のために全体として相応しく完全にデザインされており、「わたしは自分にかけて誓った。わたしの口から出ることは正しく、取り消すことはできない。すべてのひざはわたしに向かつてかがみ、すべての舌は誓い、」（イサヤ45:23）とある通りです。

開かれた神殿にある煙

15章のこの中間点は舞台と主題の変化を實際に示しています。ヨハネは7人の天使たちの幻と硝子の海のほとりに立って勝利と讚美の歌を歌っている患難期の大勢の聖徒たちと共に天にある巨大なるしを書き留めていました。しかし、いまや、物語は、この将来の栄光に満ちた勝利の歌を保証する裁きの遂行に実際に立ち返らなくてはなりません。それゆえ、ヨハネの注意は、これらの行為がまさに遂行されようとしている天にある実際の神殿と御座に向けられます。

黙示録15章5節　その後、また私は見た。天にある、あかしの幕屋の聖所が開いた。

「その後」という言葉は、ヨハネがもう一度空の巨大なるしよりむしろ空中にある実際の神殿の光景に目が釘づけにされた時、ヨハネの物の見方に明らかな変化が生じたことを示しています。

「あかしの幕屋の聖所」という独特の用語には細かい注意が必要です。ヨハネは、すでにこの「真の幕屋なる聖所」を(ヘブル8:2)示されており、さらに、長く失われていた契約の箱がそこに明らかに移されていたという驚くべき事実を記録さえ(黙示録11:19)していました。そして、天に移されたのは、たぶんネブカドネザルによる地上の幕屋が略奪された時(エレミヤ52:12,23)でしょう。

勿論、契約の箱の中には、モーセの十戒が書かれた板が入っていて、そのすべては、幕屋の最も聖なるところに置かれていて、これらは、「神(創造主)の指で書かれた石の板、あかしの板二枚」(出エジプト31:18)と呼ばれていた。したがって、アークは、出エジプト25章22節にあるように通常「あかしの箱」と呼ばれており、幕屋全体は、しばしば「あかしの幕屋」(民数記10:1)と呼ばれていました。そして、幕屋の最も大切な所は、創造主が与えた十戒の住いとしてであり、「ヤコブのうちにてたてられた」おおいなる「あかし」(詩篇78:5口語訳)であると強調しています。これらの十戒は創造主の人に対する大いなる「あかし」であり、「人に対する創造主ご自身の完全に聖なる性質」と、「創造主のかたちに創造された人に対する完全な聖の基準」の両方を現わしています。聖書はすべて創造主の息吹によるものですが、モーセの十戒は創造主ご自身が刻まれたもので、石の板に創造主ご自身の指で書かれ、選民の特別な宝物として地上の幕屋に一時的に置かれたが、それから、来るべき世にわたって創造主の永続的「あかし」として天の幕屋に永遠に納められたのです。

ヘブル語でもギリシヤ語でも幕屋と訳されている「幕屋」という言葉の本来の意味は、「住みか」という意味です。イスラエルにおいては、集会の天幕でもあった。そこで創造主は御自身の民(実際には、法にのっとって準備され清められた人々の代表である大祭司だけ)と会われたのです。しかし、幕屋はもともとあかしの箱の住まいだったのです。

黙示録のここで明らかに強調しているのはこのことです。「あかしの幕屋」は、創造主の契約の箱の天にある美しい住み家です。だがそれでは、あかしの幕屋の神殿とは何か。実際に、新約聖書で通常「神殿」と訳されているギリシヤ語は二つあります。一つはヒエロンで、神殿のある全境内に対する言及です。もう一つはナオスで、特に、至聖所そのもの、いわば、祭壇に対する言及です。ここで用いられているのは後者です。こうして、この節全体の考えは「創造主の人に対する永遠の証・創造主の十戒の住み家の内部にある至聖所

です。」

創造主が人を取り扱う歴史の最も劇的な転換点で、ヨハネは開かれたこのすべてを見ています。地上の幕屋で、後にはソロモンの神殿のように、契約の箱は、至聖所の祭壇の厚い垂れ幕の後ろに、人から常に隠されて置かれていました。「また第二の幕の後に、別の場所があり、それは至聖所と呼ばれた。そこには金の香壇と全面金でおおわれた契約の箱とが置かれ、その中にはマナのはいつている金のつぼと、芽を出したアロンのつえと、契約の石板とが入れてあり、箱の上には栄光に輝くケルビムがあつて、贖罪所をおおっていた。これらのことについては、今ここで、いちいち述べることができない。」（ヘブル9:3-5）

幕屋の最も聖なるところには、人々、祭司でさえ近づくことはできなかったのです。年に一回大祭司がそこに入る事が出来ました（ヘブル9:7）。幕屋を元に戻す為にソロモンの神殿が後で建てられた時、ソロモンは契約の箱を至聖所に置きました（Ⅱ歴代誌5:7）。何らかの理由で、この時まで、「箱の内には二枚の板のほか何もなかった。これはイスラエルの人々がエジプトから出て来たとき、主が彼らと契約を結ばれ、モーセがホレブでそれを納めたものである。」（Ⅱ歴代誌5:10）。後に、ユダ王国がまさに終わろうとしている時、ヨシアは、それまで、幕屋から取り去られほとんど忘れ去られていた契約の箱を神殿の至聖所に戻すように働きかけた（Ⅱ歴代誌35:3）が、その後ももなく神殿の破壊と略奪がやってきた。その後契約の箱とその貴重な内容物について何も知らされていません。次に契約の箱が出て来るのは、黙示録にあるこのところ、即ち天にある幕屋です。

このように、キリストの時代ユダヤ人が用いていたヘロデの宮は、その外観の美しさを誇っていましたが、最初の主の宮にあつた最も大切な中身・契約の箱と十戒は失われていたのです。特に、キリストのおられた時代の大祭司の家族の腐敗した状況を考慮すると、創造主が実際に、前の時代のように一年に一度大祭司と

お逢いになったかどうかも分からないのです。

それでもやはり、キリストは、少なくともヘロデの宮を創造主への祈りの家と見做していました（マタイ21:13；ヨハネ2:16）。キリストの十字架に際して、「神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。」（マタイ27:51）、そして、このことは、十字架でのキリストの偉大なる犠牲の結果、聖所が開かれたことを明瞭に象徴しています。「こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所にはいることができるのです。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。また、私たちに、神（創造主）の家をつかさどる、この偉大な祭司があります。そのようなわけで、私たちは、……全き信仰をもって、真心から神（創造主）に近づこうではありませんか。」（ヘブル10:19-22）。

こうして、キリスト以降、創造主に近づくための地上の幕屋、犠牲、大祭司を私たちはもはや必要としな

いのです。すなわち、創造主ご臨在の聖なる場所は、信者に常に開かれています。なぜなら、キリストご自身が、罪のための永遠の犠牲で、私達の永遠の大祭司であると共に創造主の幕屋だからです。これら天にある神殿を一瞥されたことは、非常に珍しいだけでなく非常に大切で、創造主は、それを黙示録で私たちに示し、しかも、それを開かれた神殿として示されたのです。人がキリストを通して御前に行くなら、創造主の御前から人を遠ざけるものは何もありません。主イエス・キリストの人としての御身体は、その内にある創造主の栄光と罪深い人に近寄りがたい輝きを隠すヴェールなのです。

しかし、創造主の律法は永遠で、選民と同様に他の諸民族にも適応されます。地上への最後の創造主の裁きの準備として、神殿は今の時代がまさに終わろうとする時に再び現れます。神殿は開放されます。それは

創造主に近づき得るだけでなく、反逆する世に恐ろしいほどの創造主の聖さを現わすためです。ユダヤ人も異邦人も道を踏み外してしまっており、聖さ^jを犯すことに関する律法が彼らの罪を定めます。「彼らの目の前には、創造主に対する恐れがない。さて、私たちは、律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われていることを知っています。それは、すべての口がふさがれて、全世界が創造主のさばきに服するためです。」(ロマ3:18, 19)

世界中の人が罪人です。何故なら、すべての人は律法の下にあり、創造主の救済策を拒否しているからです。「すべての人は、罪を犯したので、創造主からの栄誉を受けることができず、ただ、創造主の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」(ロマ3:23, 24)。たとえ彼らが聖書の律法を読んでいないとしても、同じ律法が彼らの心に書かれていて(ロマ2:14, 15)、「私の福音によれば、神(創造主)のさばきは、創造主がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行なわれるのです。」(ロマ2:16)とある日が遂に来たのです。幕屋の開かれた聖所、創造主の言葉で言い表せない聖さの証である十戒をはつきり現わし、石の板に永遠に刻まれたこれ以上あり得ない尊厳に満ちた義は、裁きを待ち望んで御座の下にいる贖われた聖徒たちすべてに畏敬の念を起させるに違いありません。

黙示録15章6節　そしてその聖所から、七つの災害を携えた七人の御使いが出て来た。彼らは、きよい光り輝く亜麻布を着て、胸には金の帯を締めていた。

幕屋でも住まいでもなく、聖なるお方の住居の内殿の内側にあるすぐそばにある聖所から現われたのは、地上に最後の七つの災害をもたらすために選ばれた七人の御使たちです。どの災害も、創造主のお創りになった自然界の物理作用の一つまたは幾つかを扱わなくてはなりません。黙示録だけでなく他の聖書箇所でも既に観察したように、御使たちは並外れた力と多方面にわたる知識を兼ね備えた霊的存在で、このような過程の速さと強さに影響する多くの要因を理解し、それらを管理しており、状況が整い創造主が許されれば、それらを変える事の出来る存在です。

彼らの装いは重要です。きよい光り輝く亜麻布を着て、胸には金の帯を締めていたのです。新約聖書で亜麻布と訳された異なることばが新約聖書に四つありますが、その一つが、ここで一回だけ用いられていることばリノン・linonで、この言葉から英語のことばそのものが出て来たのです。古代の写本の中の少しは、Limonの代わりにLithos(石)ということばを用いています。そういうわけで、近代の多くの翻訳が亜麻布の代わりに御使たちが純粹の白い石の衣を着ていると訳しているのです。

これらの御使たちがなぜ石のドレスを着ていたに違いないと理解するより、慎重さを欠いた写本家が亜麻布リネンということばを石リソスという言葉に置き代えたと理解するほうが容易に思われるので、亜麻布が正しいとするのがもっともらしいのです。けれども、「石」が原著の真の言葉であることが証明されるなら、その時可能な解釈は、御使たちによって加えられる災害は、よこしまな世に対する創造主のあかしの石の板に基づいているに違いありません。

一方、これらの天使達が白い亜麻布の衣をまとっているのは実に相応しいはずですが、なぜなら、それは、御使いたちが明らかにし護るところの贖われ清くされた聖徒たちの衣服だからです(黙示録3:5, 18:19:8, 14)。さらに、それは、人の子としてのイエス・キリストご自身の服装そのものです。ダニエルが(ダニエル10:5,

この幻で、またヨハネが実際に（黙示録1:13, 14）見た通りの服装で、胸には特別な金の帯をしめていたのです。白の麻布は義を物語り、金の帯は富みと美を物語っています。創造主が聖さにおいて完全で、あらゆる邪悪を清めるように、創造主はまた実に美しく、地にある満ち満ちた富すべてを所有しています。したがって、すべての邪悪と欠乏は最後にすべて取り除かれなくてはなりません。

黙示録15章7節 また、四つの生き物の一つが、永遠に生きておられる神・創造主の御怒りの満ちた七つの金の鉢を、七人の御使いに渡した。

七人の御使たちは既に七つの災害を携えています。今や、彼らは各々創造主の怒りの満ち満ちた金の鉢を1個ずつ受け取ります。

ギリシャ語でその言葉は *phiale* フィアレで、欽定訳聖書では (*viai*・鉢) と訳し、他の多くでは (*bowls*・はち) と訳しています。多くの者は、それは幕屋または聖所で香を焚くための香炉として用いる浅い皿への言及と考えています。その正確な意味はなおはっきりしていません。

その入れ物の厳密な性質は何であろうと、そこには創造主の怒りがぎっしりと詰まっています。裁きに関して襲い掛かる最後の特徴は、これらの鉢は大きくて重いつぼであることを示唆しているのかも知れません。そして、腹を立てた創造主の激怒で溢れ出るまで、炎の燃える海に深く浸し取り出します。すなわち、それらの鉢は、香炉で、甘い香りではなく火か硫黄が燃えているのです。

怒りの杯は、四つの生き物の一つから受け取ります。その4つの生き物は、5章で示したようにケルビムそのものです。これら高く挙げられた生きものは封印の裁きで活発に動いており（黙示録6:1-6）、今や再び鉢の裁きを始める場面に現れます。ラツパの裁きは、創造主の前に立つ七人の御使たちに七つのラツパが与えられる時に始まっていたのです（黙示録8:2）。そして、これらもまた、おそらく生きものによって彼らに与えられたと思われれます。創造主の御前で創造の時から関わってきた四人の力あるケルビムは、御自身の御心と永遠に関係しており、創造における御自身の聖なる目的を管理しています。

しかし永遠の昔から「永遠に」生きておられる方は創造主お一人だけです。この注目すべき節（文字通りには「*for ever after aeon*」）は新約聖書に21回出てきます。救われない人々の継続的裁きについて3回、救われた人々に対する終わらぬ御国におけるよろこびに関して1回、永遠の過去から永遠の未来に至るまで存在している唯一の方である創造主の独特の御性質に関しては17回です。その節が聖徒たちに当てはめられたその場面がまさに最後で「…主なる創造主・神が彼らを照し、そして、彼らは世々限りなく支配する。」（黙示録2:2, 5）との宣言です。

黙示録15章8節 聖所は神の栄光と神の全能から立ち上る煙で満たされ、七人の御使いたちの七つの災害が終わるまでは、だれもその聖所に、はいることができなかつた。

鉢が怒りで満たされるにつれて、聖所は煙で満たされた。煙（ギリシャ語カプノ・*skapnos*）という言葉は、黙示録18章9節にあるように火から立ち昇る煙、黙示録8章4節で用いられているように香炉から立ち上る煙、そして、ここでは創造主の聖なる御臨在の場から立ち昇る栄光の煙にも同様に用いられています。

創造主ご自身は誰も近づくとできない光の中に住まわれる（1テモテ6:16）けれども、これまで聖所は煙では満たされていなかったことは明らかです。しかし、創造主の怒りが溢れ出て、いわば、創造主の聖なる輝きと創造主の侵すべからざる力の両方が、反逆する地に際限なく注ぎ出され、炎のように輝いている渦巻く雲を生み出し、どのような人々も、御座の近くにいたる贖われた群衆であろうと通過することは出来ません。地上にも同じような特別な出来事がありました。幕屋が建立され創造主への奉仕のために献納された時、「そのとき、雲は会見の天幕をおおい、主の栄光が幕屋に満ちた。モーセは会見の天幕にはいることができなかつた。雲がその上にとどまり、主の栄光が幕屋に満ちていたからである。」（出エジプト40:34, 35）。ソロモンの宮が献納された時も同様であった。「祭司たちが聖所から出て来たとき、雲が主の宮に満ちた。祭司たちは、その雲にさえぎられ、そこに立つて仕えることができなかつた。主の栄光が主の宮に満ちたからである。」（1列王8章10、11節と）。

イザヤが見た天にある神殿の幻は同じような光景であった。そこで、イザヤはセラフイム（恐らく、ケルビムと同じく、少なくとも非常に近い関係にある）を見た。そこで叫んで言った。『聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満つ。』その叫ぶ者の声のために、敷居の基はゆるぎ、宮は煙で満たされた。（イザヤ6:3, 4）。同様に、ケバル川のほとりで主の栄光がエゼキエルに近づいているかのように、「激しい風とともに、大きな雲と火」が、その中には四つの生き物（又は、ここでもケルビム）を取り囲んでぐるぐるとひらめき渡りながら北から来るのを見たのです（エゼキエル1:4）。

古代のユダヤ人に「シエキナ」栄光として知られていたこの栄光に満ちた天上の雲は、創造主が人を取り扱う重大な局面に際して、聖書ではこのように創造主の親しい御臨在と関係して出て来ます。人は誰ひとり言い表すことのできない全能の聖なる創造主の御前に近づくことはできませんが、栄光の煙は、人が聖なる創造主の御前にいることを保証し、聖なるみこころが達成されたことを保証するものです。七人の御使たちが創造主の御前から地に最後の七つの災害をもたらすため創造主の職権を携えて現れた時、さらに、彼ら選ばれたケルブから裁きを施行するための創造主の怒りの満ち満ちた鉢を受け取った時、その時、栄光の雲がもう一度創造主の聖なる天の聖所を満ちた。今回は、栄光の雲は地が徹底的に清められるまでこれから後ずつと取のけられることはありません。そして、贖われた人々による新しい祭司職による永遠の奉仕が天の聖所でその働き始めるはずです。

附：15章 口語訳

わたしはまた、天にもう一つの大きな驚くべきしるしを見た。七人の天使が最後の七つの災いを携えていた。これらの災いで、神の怒りがその極みに達するのである。

わたしはまた、火が混じったガラスの海のようなものを見た。更に、獣に勝ち、その像に勝ち、またその名の数字に勝った者たちを見た。彼らは神の竖琴を手にして、このガラスの海の岸に立っていた。

彼らは、神の僕モーセの歌と小羊の歌とをうたった。「全能者である神、主よ、／あなたの業は偉大で、／驚くべきもの。諸国の民の王よ、／あなたの道は正しく、また、真実なもの。」

主よ、だれがあなたの名を畏れず、／たたえずにおられましようか。聖なる方は、あなただけ。すべての国民が、来て、／あなたの前にひれ伏すでしょう。あなたの正しい裁きが、／明らかになったからです。」

この後、わたしが見ていると、天にある証しの幕屋の神殿が開かれた。

そして、この神殿から、七つの災いを携えた七人の天使が出て来た。天使たちは、輝く清い亜麻布の衣を着て、胸に金の帯を締めていた。

そして、四つの生き物の中の一つが、世々限りなく生きておられる神の怒りが盛られた七つの金の鉢を、この七人の天使に渡した。

この神殿は、神の栄光とその力とから立ち上る煙で満たされ、七人の天使の七つの災いが終わるまでは、だれも神殿の中に入ることができなかった。

